西谷伝道所礼拝 6 月 14 日　マルコ 4：26－32　「神の国を成長させるのは」

本日は皆様と共に主を礼拝できますことを心より感謝いたします。神戸改革派神学校で特別研究生をしています、吉田崇と申します。

春先から新型コロナウイルスの脅威が日本、そして世界各地に広まりました。現在の人類は生身のままではこれに太刀打ちできません。マスクをするとか、他の人のそばにむやみに近寄らないとか、ウイルスをもらわないようにする策を講じて、ようやく一日一日を生活できるという状況が今も続いております。人間は宇宙にロケットを打ち上げることもできる万物の霊長とか得意げになっていたけれど、本当は実に無力な存在でしかないことを改めて痛感させられたのではないでしょうか。

そうした無力さで心細くなる時には「寄らば大樹の陰」という言葉もあるとおり、何か自分を守ってくれる、自分より大きな存在に身を寄せたくなるところであります。日本では日本政府にそうした期待を寄せた人々もあったかもしれません。しかし政府がそうした期待に応えてくれたと感じる人は多くはないようです。内閣支持率がだんだんと低下しているとマスコミでは報道されています。

ひと時静まって神様の御言葉に心を向けてまいりたいと願います。

説教で取り上げます聖書箇所はマルコによる福音書 4 章 26 節以下のイエス様のたとえ話の箇所であります。イエス様は神の国、天の父なる神様がご支配なさる世界がどのようなものか、どのように成長していくのかを、たとえによって人々に伝えようとなさいました。26 節から 29 節は神の国を植物の種にたとえてお話になります。人が一度土に種まけば、あとは種が芽を出し、実を結ぶまでに成長する。人は実ったところを収穫するだけだと語られます。28 節に「土はひとりでに身を結ばせる」とありますが、「ひとりでに」と訳される言葉は「アウトマテー」と発音する言葉、英語のオートマティックのもとになった言葉が使われております。普段から畑を耕し人の手をかけて野菜や花など作っておられると、植物、作物は人の手をかけないと育たないものだと思われるかもしれません。ただ身の回りには野生の植物もあるのです。人の手をかけられていないけれど、芽を出したくましく成長していく雑草なども少なからずある。特にイエス様がお語りになったイスラエルでは、旧約聖書の教えが人々に浸透しておりました。旧約の最初創世記では、神さまが天地万物を作られたとき、人間よりも草木が先に創造されたと記されています。最初の人アダムが創造された時にはエデンの園では既に草木が立派に生い茂っておりました。この草木に光合成によって酸素を作り出してもらわないと人は生きていけなかったこともあったでしょう。こうして聖書の時代の人々には、人が種まき、それからどうなるか人は分からないのだけれど、気がつけば神さまが芽を出させ成長させ実りにまで至らせるという理解が浸透していたのです。このように、神様が治める神の国は、人の手を借りなくてもどんどんと大きくなっていき、実を結んでいくのだとイエス様はおっしゃいます。

更に続けて、イエス様は30節から神の国をからし種にたとえてお語りになりました。からし種は31節で「地上のどんな種よりも小さい」と言われていますが、一粒の大きさが数ミリと大変小さな種だそうです。また現代の植物学では木ではなく草に分類されるとのことですが、それなのに高さ2、3メートルほどの大きさにまで成長するということです。神の国もそれに似て、始まりは人目につかないほどちっぽけなところから始まる。だがいつしか成長し、葉の陰には空の鳥が巣を作ることができるほどになる、とイエス様はおっしゃるのです。「鳥が巣を作る」と訳してある箇所は、元来「鳥が寝る」と訳せる言葉が使われています。実際文語訳では「鳥が葉の陰に棲みうるほどになるなり」と訳されます。文語訳の「すむ」は「終（つい）の棲家」の「棲む」という漢字を用いています。要するに十分に成長した神の国という名のからし種は、無理矢理にでも巣を作ろうと思えば作れなくもないという程度の危ういものでなく、天敵など様々な脅威から身を守る場所として終の棲家と言えるほど長く棲み着ける場所になる、それほどの場所になる。

からし種のたとえが単独で語られず、26節からの、種はひとりでに成長するというたとえとセットで語られていることに心を留めたいと願います。からし種のたとえでは、神の国という種にはからし種にも似てとても小さなところから大変大きく成長する力が込められていることが語られています。潜在能力、ポテンシャルが高い。ただ人間の側はそう聞くとつい口を挟みたくなります。この高い潜在能力を引き出すには人間の働きが欠かせないだろう、と。けれども26節からのたとえ話において、人間の働きが成長には不可欠という発想は排除されています。ですから、神の国というからし種は一度巻かれるならば、人間の関与がなくても持てる潜在能力を十分発揮し、驚くほど大きく育つことができることをイエス様は示しておられるのです。

自分がまことに無力であると感じている人間にとってはまことに大きな福音であります。金田先生からイエス様の山上の説教の解き明かしを通して、神様が本来、人間にどんな生き方を求めておられるかを学んできていますが、それらは私ひとりの力で成し遂げようとするにはあまりに厳しく感じてしまうものであります。そこでどうするか。金田先生が説教で繰り返し語っておられることでもありますが、天の父なる神様、この私を憐れんでください。神様がご支配なさる神の国に入れてくださり、この私を作り変えてください、とよりすがる。その時、神様は私たちの心という地面に神の国の種をまいてくださり、それを成長させてくださる。聖書の神様など信じられない、と言っていた者から、聖書の神様を信じ、イエス様を救い主キリストと信じるまでに作り変えてくださる。

キリスト教会もイエス・キリストを教会のかしらと崇めていることからしてイエス様の言う神の国の一つの表れであります。この教会に入れていただいているけれど、高齢なり様々な理由で教会の奉仕が難しい、多くの献金を献げたくてもそれができない、教会や神の国にとって何もできない私は足手まといになっているのではないか、と思われる方もあるかもしれません。だからせめて何人かしっかりした人が、牧師先生とか教会役員が教会にはいてもらって、大黒柱となってほしい。しかし時に、体調のことやら様々な要因で、牧師が

休養されたり、働きを続けられなくなる時が来ることもあります。人間的には、大黒柱を失うように思えて不安が募ることになるかもしれません。けれどもイエス様はたとえを通しておっしゃるのです。神の国は人間ではなく、神さまが成長させてくださる、進展させてくださるのだと。

この関連でもう一点だけ申しますと、神の国がからし種にたとえられていることについて、ある新約聖書の研究者がこういう趣旨のことを言っていました。イエス様は、神の国が、見かけにおいてどんな人間をも圧倒させるような巨大なものではないことを示そうとされたのだ、と。からし種は、種が小さいわりには大きく成長するのではあるが、所詮は「大きくなる草」にとどまる。もし神の国が感覚的に人間を圧倒する巨大なものになると言いたかったならば、大きな木、大木になぞらえたであろう。

日本において、大木を思わせるような巨大なキリスト教会というのはほぼ見かけません。キリスト教以外、特に新興宗教と言われる団体の一部には、何百人も収容できる建物と広い敷地の駐車場をそなえた礼拝施設を各地に建設するところもあります。こうした外見だけで比べると、新興宗教の方が「寄らば大樹の陰」と頼りになりそうという思いを人々に与えるのかもしれません。しかし見た目の規模が大きければ人間が本当に安心できるかと言えばそうとも言えない。政府、役所は日本全国にわたる巨大な組織でありますが、多くの人が本当にきちんと動くのでないと、小回りが利かない、いわゆるお役所仕事になってしまうこともある。むしろ私たちを苦しめ悩ますものになる場合もある。

肝心なのは本当の意味で愛をこめて私たち一人一人に働きかけてくださるかどうかであります。天の父なる神様、救い主イエス様が治めてくださる神の国にはそれがあります。規模の大きい小さいを問わず神様の愛の御手が差し伸べられ、私たちを罪から解き放ち、私たちを作り変えてくださる。何より十字架にかかって死んでくださったイエス・キリストにおいて、神の国、神様のご支配、神様の愛の働きかけは、豊かにあらわされるのです。